

塵芥ヒ一口一列伝？

黒津

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

その時々で思いついたのを書いていきます

自己満足です、数話書いたら終わります、丸投げジャーマンです

なんだったら勝手に使っても結構です

「くつくつく、俺が最初の刺客……ウボアー!!」とかでもご自由に

目次

コネクトプリキユア設定2 | |

63

第一話・コネクトⅡプリキユア | 1

第二話・コネクトⅡプリキユア、その2

10

第三話・コネクトⅡプリキユア、その3

19

第四話・コネクトⅡプリキユア、その4

28

コネクトプリキユア設定1 | | 37

第五話・コネクトⅡプリキユア、その5

43

第六話・コネクトⅡプリキユア、その6

53

第一話・コネクトIIプリキユア

そこには誰もいなかった。

アスファルトの道路にコンクリートの建物。

そこに生きる人々がいれば普通の街並みだ。

だが、そこには誰もいなかった。

いや……2つだけ、生きているものがいた。

一方はファンシー、という言葉が似合いそうな小動物。

もう一方はヒーロー、という言葉が似合う格好の人物。

ただし、小動物に武器を向けている姿をヒーローと呼ぶのなら。

「くきゅうー、くきゅうー」

小動物は血塗れの姿で『ヒーロー』に呼びかける。

しかし、ヒーローはヒーリングのごとく……

「まだだ、まだ足りない……」

返り血を浴びたヒーローは一人の男に姿を変えて闇夜に消える。

「行つてきまーす!!」

「行つてらつしやい」

今日も元気に家を出る娘に微笑んで見送る両親。

しかし、父親の心の中は複雑だった。

「僕はまだ『パパ』なのか……」

「サクヤさん……」

明日原家は一度、父親を亡くしている。

今の明日原の大黒柱は娘とは何の繋がりもないのだ。

「あの子は位牌を自分の部屋から出さないようだね。やっぱり僕は父親として認めてもらえないんだらうか……」

「大丈夫よ、サクヤさん。いつか、きっと……」

「キョウコ……うん、そうだね」

いつか、彼女の本当の父になるために。

いつか、本当の家族になることを信じて。

明日原今日子（アスハラキョウコ）、明日原咲治（アスハラサクヤ）の一日もはじまる。

|||||C|||||N|||||C|||||

|||||T|||||

「ツムグーっ、ごめーんっ!!」

閑静な住宅街に響く叫び声。

ミライが友達と合流したのは家を出て大分経つてのことだった。

「まったく、アンタまた人助けしてたの?」

「いやあ、お婆ちゃんがすっごい荷物を……」

「はいはい、アンタの正義っぷりは分かってるわよ」

一本道紡(イツポンミチツムグ)、警備員を父に持つ彼女は自分の友人に父と近いものを感じていた。

彼女の人助けは今にはじまった事じゃない。

ひどい時は遅刻をしても誰かを助けるのだ。

家が近い彼女と登校するようになってからはマシになったものの、合流する前に人を助けるから遅刻寸前なのが現状である。

「まったく……いい加減にしてほしいわね?」

「ごめん、でも父さんのクセだから」

「あ、ごめ……」

「いいよ、これでも父さんのことは誇りに思ってるから」

「さっきまで寝てただけあつて清々しい声ね？」

ミライの声とは逆にツムグの声は重い。

何か凄い真剣に頼まれたのだ、先生から、ミライのことを。

だが正直に言つて勘弁して欲しい。

興味のない事は極端にやる気のない彼女。

そんな彼女は興味のあることに全力を尽くすのだ。

それこそ、尽くしすぎて常にバッテリー不足だから授業中に眠るほどに……

「……つていないし」

「ツムグーっ、こつちこつちーっ!!」

「アンタ、どこ行つて……なにこれ？」

ミライの足元にいたのはファンシー、という言葉が似合いそうな小動物だった。

ミライに向いて鳴いているのを見る限り、ぬいぐるみではなさそうだ。

「くきゅー、くきゅー」

「はっ、これはもしや!？」

「知つてるの、ミライ？」

「セイントファイターのセイントパートナー!!」

Q: セイントファイターとは？

|| || || || || T || || || || || || || || ||

ツムグの声を聞いてやって来た警官。

その話を聞いて大騒ぎした家族と話を終え、ミライがベッドに入ったのは深夜だった。

「今日は大変だったなー」

「くきゅ？」

「キミって……何なん……」

明日原未来（アスハラミライ）、いつもと違った彼女の一日はこうして幕を閉じた。

しかし男の目的は彼女ではなかった。

「昨日の動物、渡してもらえるかな？」

「どうするつもりか教えてくれないきや渡せないわよ」

「アレはお前の家にいるのか？」

「こっちの質問に答えなさいよ！」

「くきゆうー？」

「そう、くきゆうー……って?！」

そこにいたのは話題の中にいた小動物だった。

何も分かっていないかのような愛嬌のある表情をしている。

「手間が省けたな」

「だめ、渡さない!!」

近寄る男の前に立ちふさがるミライ。

傍から見れば悪の手先と正義のヒロインだ。

男はそれほど大柄ではない、もしかしたら義父より小さいかもしれない。

しかし、その眼は少女でも分かる。

明らかに敵意と殺意を持っている、そんな眼だ。

「ちよつと、ミライ!!」

「だから渡せとிட்டたんだ……ネルル!!」

「ねーるるー!!」

男の声に飛び出す小さな影。

それは妖精と言っても過言ではない、愛らしい動物だった。

「な、なに、もうわけ分からない……」

「よ、妖精?!」

「コルル、クルル、二人を頼む!」

「ぶぎゅあつ!」

「何なの、説明してよ!!」

ゴーストタウン、豹変した動物、急に現れた三匹の妖精。

そのうちの一匹はミライの顔にぶつかつた。

少女には理解できない出来事のオンパレードだ。

「……つたく、お前たちの見つけた動物はファンシーマだ」

「ふあんしー、ま?」

「ファンシーマは妖精の国、コネクティア王国の住人だ」

「あんなのが妖精なの!?!」

ツムグの言いたいことも分かる。だが事実なのだ。

妖精の国に比べ、人間の国は汚れている。

その汚れが王国で最も純真なファンシーマを凶暴化させたのだ。

そして、それを追って人間の国にやってきた者がいるのも事実である。

「説明は終わりだ、コルル、クルル」

「はやく逃げるコルルー!」

「にげないとあぶないでくるー!」

妖精たちに手を引かれて離れていくミライとツムグ。

羽賀根森人（ハガネモリヒト）は懐から携帯電話とカードを取り出した。

その隣には妖精のネルルがいる。

「ごめん、救ってやれなくて……ガルディオ・バレルコネクト!!」

携帯電話のスリットにカードを走らせる。

するとネルルが携帯電話に吸い込まれ、携帯電話は装飾銃へと変化する。

銃から放たれる光はモリトの鎧へと形を変える。

誰もいない街並みで小動物を撃った、揺らめく炎の森で絶望した……

それでも戦うことしか出来ない、戦士へと姿を変えていく。

『Card registration・For transformation
limit 60』

さあ、準備は終わった。

戦いのはじまりだ。

高らかに宣言せよ、戦士の名は……

「守護の銃身、ディオ・バレル!!」

見るものによっては『リス』とも『ウサギ』とも表現できるだろう。こんな巨大で凶悪なリスやウサギがいるかどうかは別として。

そして巨体、ファンシーマの前には黒い戦士、デイオバレルがいた。

「なんだか怖いでねるー」

「我慢してくれ、いつも通りに戦うしかないんだ」

いつも通りに戦い、いつも通りに始末する。

デイオバレルには、それしか選択肢がなかった。

しかし、今回ばかりは彼にも疑問がある。

（今さっき凶暴化したのにファンシーガ級じゃないか？）

凶暴化したファンシーマは時間が経てばファンシーガへ更に凶暴化する。

このファンシーマはどう見てもファンシーガ並みになっているのだ。

だが、ここで退くわけにもいかない。

デイオバレルは腰のカードケースからカードを取り出す。

ネルルと携帯電話が変化した銃、ネルバレラーで読み取るためだ。

「バレルコネクト・トゥーハンド！」

カードの力で分裂するネルバレラー。

今、ゴースト商店街は戦場となる。

「時計が動いてないから分からないけど、それくらいかな？」

商店街のあった場所では未だに戦いの音が聞こえる。

このゴーストタウンが伝説の守護者の仕業なら、解放されるのはまだまだ先のよう
だ。

そんな中、妖精はそわそわとしている。

「信じられないくらい強いコル」

「……ちよつと、どういうこと？」

「モリヒトはどんなに時間がかかっても30分で決着をつけたコル！」

「これいじょうはきけんくるー！」

自分に手を引かれていたお気楽生物のクセに？

この表情はそれを思わせない表情だった。

「これ以上戦うとどうなるの？」

「これ以上戦うと変身が解けるコル」

「へんしんがとけると、このせかいももとのせかいにもどるくる！」

「元の世界……って、それじゃ!!」

「倒せなかったファンシーマも……元の世界に」

爆発音は止まらないますまだ。

いや、むしろ逃げていた時より激しく感じる。

「いつも、そんなギリギリで戦っているの?」

「今度のファンシーマがすごく強いコル」

「ファンシーマのつよさはやどぬしのこころのつよさくるー」

「宿主って……私!?!」

ファンシーマは純真な妖精の国の住人である。

しかし人間の国の汚れはファンシーマを凶暴化させる。

そして、その力の強弱は面倒を見た人間、宿主に左右される。

「バカ言わないで!ミライは汚れてなんかないわ!」

「ぐりゅりゅりゅー!」

「ツムグ、落ち着いて!」

「悪い考えだけが汚れじゃないコル」

「悪い考えだけじゃない……そうだ、力が欲しかった」

「……ミライ?」

それは少し前だったか、大分前だったかは覚えていない。

しかし、父が死んだ後の冬だったのは分かる。

母が泣いていたのだ。

しかし、それでもファンシーマは止まらなかつた。

「単純な力押しじゃ倒せないな、コイツは」

「もう、残り時間が15分しかないねえ！」

「残ってるカードは？」

「コール、ループ、ライドの3枚だけねえ……」

通信、空間制御、戦闘補助……攻撃的なカードは使い切つた。

しかし、それだけあれば充分だ。

ディオバレルは3枚のカードを取り出す。

「ネェル、ここでさよならだ」

「……イヤだねえ!!」

「変身を含めた4枚のオーバードローによる自爆攻撃しか方法はない」

「ほかの方法を探すでねえ!!」

「ないよ、今の俺たちには」

いや、一つだけ方法がある。

敵は物理的な攻撃で倒すことは出来ない。

なら、物理的でない攻撃を使えばいい。

しかし、それは『ガルディオ』の分野ではなかつた。

伝説の戦士は3人いる。

浄化の乙女、守護の戦士、踏破の勇士

今、この状況を打ち破れるのは浄化の力しかない。

しかし、ディオバレルにその力はないのだ。

「行け、新しい3人を見つけてるんだ！」

「イヤねる、イヤねる、イヤだねるー!!」

互いに大切だから意見の食い違う一人と一匹。

しかし、その敵は無情にも近付いていった。

「ぐぎゅああああああああつ!!」

「……………つたく、ここで終わりか」

「待ちなさあああああい!!」

「……………はっ。」

もう、変身と無人世界を維持するので精一杯だ。

確かに浄化の乙女の力なら、あのファンシーマを倒せるかもしれない。だが、やれるのか？

今、この瞬間に変身したばかりの子供が……

「ぐぎゅあああああああああああつ!!」

「よし、来なさ……つて速つ!!」

あの巨体からは想像出来ないスピードで迫るファンシーマ。

キュアネクストは咄嗟に一枚のカードを取り出す。

「ネクストコネクト・ハイテンション!」

次の瞬間、ファンシーマ以上のスピードでキュアネクストが動き出す。

そして連続バク転でファンシーマの突撃を回避してしまった。

「わははははは、NSAS式連続バク転!!」

「凄い……」

「わははははは、ハぶしっ!!」

「凄い……バカだ」

バク転しすぎて壁にぶつかった。

ハイテンションは肉体を上向きに強化する代わりに、精神的にも上向きに強化してし

まうカードなのだ。

「ぐぎゅあああああああああつ!!」

「はっ、ほっ、なんのっ!?!」

しかし失敗したのは一度だけだ。

その後は的確に攻撃を避け、隙を見ては一発ずつ攻撃をいれている。

しかし、その程度でファンシーマは倒れない。

そんな攻撃で倒せるのならディオバレルの攻撃で既に倒せているはずだ。

「くっ、全然倒せないよ!どうすればいいの!?!」

「フィニッシュのカードだ、それしかない!!」

ディオバレルの助言が飛ぶ。

しかし、フィニッシュのカードがどれか分からない。

もたついている間にファンシーマの攻撃が命中した。

「へぶっ!?!」

「あのガキ……考えるだけでいい、必殺技のカードが出てくるように願え!!」

「必殺……必殺技、必殺技、必殺技!!」

ケースの中に並んだカードから一枚だけが顔を見せる。

ふちが金色のカードは確かに特別そうに見える。

「この事は他言無用だ、分かるな？」

その眼は出会ったときと同じ、鋭い眼だ。

「待つコル、ミライはようやく見つけた……」

「コルル、お前はそいつらに色々教えておけ」

モリヒトにとってはようやく出来たはじめての仲間のはず。

しかし、彼の態度は冷たいものだった。

「俺は……あんなガキがプリキュアとは認めない」

デイトバレル

守護の戦士ガルディオに変身したモリヒト。

変身した当時は他の戦士がいなかったために単独でも戦えるように多数のカードを持つ。

ネルルとガラケーが融合した装飾銃ネルバラーが主な武器。

情報端末がガラケーなのはモリヒトにとって情報端末がガラケーだからである。

|| 保有カード ||

変身 (デイトランス)

デイトバレルへの変身。

掛け声は「ガルディオ・バレルコネクト」

カード使用時は「バレルコネクト・〇〇」

呼出 (コール)

妖精の国や情報端末との通話呼び出し。

結界 (フィールド)

使用者が指定したもののだけを残した無人世界の形成。

ただし、いくつかの例外は無人世界に進入可能。

その空間で物体が破壊されても現実世界の物体に影響しない。

範囲は使用者を中心とした球状で大きさは自由だが、大きいほど破壊されやすい。よって、ファンシーマを取り込む際は近付いて使用するのが基本。

輪列（ループ）

特定の空間を繋げた閉鎖空間の形成。

結界の低位能力だが結界の中で重ねがけすることが可能。

騎乗（ライド）

高速二輪車マシンバレーの使用。

二刀流（トウーハンド）

武器の二刀流、二丁拳銃化。

オーバードローにより消失。

強化弾（マグナム）

飛び道具の破壊力を強化する。

オーバードローにより消失。

殲滅機（ランチャー）

広範囲攻撃の発動装置。

オーバードローにより消失。

包囲網（フルレンジ）

複数の攻撃端末による同時攻撃。

オーバードローにより消失。

速攻撃（ラピッド）

攻撃速度の強化。

オーバードローにより消失。

爆裂化（エクスプロード）

攻撃に爆発を加える追加ダメージ。

オーバードローにより消失。

最終攻撃（フィニッシュ）

ディオバレルの最強兵器、いわゆる必殺技。

オーバードローにより消失。

第五話・コネクトⅡプリキュア、その5

「……つたく、頭が痛い」

別に本当に頭痛がするわけじゃない。

昔からの精神的に暗いときの口癖なのだ。

モリヒトはカードと携帯電話を取り出す。

「バレルコネクト・コール『メガネ』」

『ちよつと、人の事をメガネで呼び出すのはやめてくれないかな?』

コール、それはリターン同様に妖精の国に直接繋がる数少ないカードの一つだ。使用宣言の後に名前を呼び、顔を思い出せばどんな状態でも繋がる。

呼び出したのは妖精共存派の一人であり、現在も妖精の国で研究を続ける学者、通称メガネだ。

『それよりプリキュアのカードが人間界に送られていたけど?』

「ファンシーマが一匹送還されたはずだ、分かるだろ?」

『そっか、ようやく仲間の登場だね?』

メガネは安心したような声を出す。

彼もモリヒトが妖精を愛しているのを知っている。

プリキュアの誕生、それは始末することでは救えなかった妖精を助けられる事でもある。

しかし、今回の話はその報告だけではない。

「王国会議はどうなった？」

『プリキュアの誕生と共にガルディオの契約解除が出ている』

「ガメツト族とジャステイン族か？」

ガメツト族は妖精の中でも珍しい金銭や利益に執着する種族であり、ジャステイン族はガルディオの復活以前から王国を守る守護妖精の種族だ。

どちらも王国会議で反対意見を出す代表格だ。

『ガルディオは妖精共存派やルルル族の独占みたいなものだからね、いい気がしないんだらうよ？』

「そうか……ファンシーマは？」

『キミが凶暴化した同族を始末した事かい？それだったら受け入れてるようだよ』

「……………」

『つらい役目を押し付けたって言うてるよ』

「……つたく、現代人つてのは警戒心がないのか？」

モリヒトは林の中で愚痴をこぼした。

彼も現代人といえばそうなのだが、数年近くを妖精の国で過ごしていたために感覚が分らないのだ。

『まさか携帯電話がタッチパネルになってたとは、驚きだねー？』

「うっさいよ……それより俺のカードのストックは何枚ある？」

『全然ないよ、キミがまとめて持って行っただけで最後だつてば』

「ガルディオでも使える浄化のカードは？」

『そっちも無理、技術系が違いすぎて流用なんか出来ないよ』

最悪だ、このままでは子供に手助けしてもらおう羽目になる。

『まったく、気難しいねキミは？』

「……いいからカードの増産と研究を急げ」

コールを解除して携帯電話をしまう。

状況は悪くなる一方でしかない。

王国と日本の交流がなかった為に資金援助や住居提供もロクにない状態だ。

国庫の宝石をいくらか持ち出してはいるが、妖精にとって価値のある宝石など高が知れている。

『たくさんあって凄い』『キラキラして凄い』『何となく凄い』のどれかだ。

別にそれを怒るつもりはないのだ。

それが妖精の好みとしか言いようがないのだから。

「ネルル、クルル、行つていいぞ」

「行くつて、どこねる?」

「ぼくはここでもいいくるよ?」

正直に言えば、あの少女に頼りたくない。

だが、このままの生活では妖精が参ってしまうかもしれない。

まさに八方ふさがりだ。

そんなことを考えながら、今夜も林の中で眠りにつく伝説の戦士だった。

|||||T|||||C|||||N|||||C|||||

|||||T|||||C|||||N|||||C|||||

「私って嫌われてるのかな」

「急にどうしたコル?」

ベッドの中でミライは呟いた。

気になっているのは先輩のディオバレルについてだ。

「……そもそも、どんな人なんだろ」

「羽賀根森人、数年前に妖精の国に迷い込んだ人コル」

数年前、人間たちが妖精の国に迷い込んだ。

未知の世界に迷い込んだ人間は二つの派閥に分かれた。

妖精利用派と妖精共存派である。

妖精利用派は妖精の力を利用し、妖精共存派は王国に伝わる力を使って互いに争った。

「その時に復活したガルディオの力を手に入れたのが……」

「そう、モリヒトコルよ。モリヒトは戦いが終わった後も妖精の国に留まって、みんなを守り続けたコル」

そう、長い間を戦い続けてきた。

様々な国に繋がるコネクティア王国だからこそ、様々な国の悪しき存在が現れるのだ。

守護者のプライド、自分があつかりと並んでいいものだろうか？

「でも、モリヒトは優しいコルよ？」

どこがだろうか？

『あのガキ』とダウナーな目で睨みそうだ。

優しさって何だっけ、と考えたくなる。

林の中から出てファンシーマを探そうとする一人と一匹。
すると、巨大な何かが彼らの前を通り過ぎた。

「いだってえええええんっ!!」

「……つて速えっ!？」

ドドドドと地面を揺らして走り去るファンシーマ。

凶暴化するとファンシーじゃないのは知っているが、あれはムキムキマッチョなランニングマンだった。

「ボーっとしてる場合じゃないか、バレルコネクト・ライドー!」

モリヒトは林の奥に隠したバイク、マシンバレーを召喚する。

ファンシーマと戦う際は結界で無人世界をつくる必要がある。

しかし、ファンシーマを巻き込むには距離が大きすぎるのだ。

仮に結界に巻き込んだとしても、ちよっとした衝撃で結界が破壊されてしまう。
だからこそ、可能な限り距離を縮めなければならない。

「さて、安全運転ですっ飛ばすか」

第六話・コネクトルプリキュア、その6

「……つたく、予想以上のスピードだ」

ファンシーマを追いながらモリヒトは愚痴をこぼした。

人間の国から迷い込んだバイクを妖精の国の技術で改造したのがマシンバレラーだ。加速力や耐久性の強化はもちろん、人工妖精により自動操縦すら可能なのだ。

しかし、前を走るファンシーマとの距離は大して縮まっていない。

「いだってえええええんっ!!」

「仕方ない、何発か撃っておくか?」

『コール・ネクスト』

「……………」

『コール・ネクスト、コール・ネクスト、コール・ネクスト』

妖精産携帯電話に着メロはないのか、呼び出しメッセージが連続で再生される。

「……………どうした?」

『あの、私も手伝います!!』

「……………どうやって?」

「守護の銃身、ディオ・バレル!!」

上空に跳躍するマシンの上で変身したディオバレルは銃を構える。

一発、二発、ネルバレラーの銃弾はファンシーマの足場を崩していく。

当然、猛スピードで走っていたファンシーマも勢いで直線に転んでいく。

「バレルコネクト・フィールド!」

公園の柵に触れるかどうかの瞬間に無人世界を作り上げる。

盛大に転んで樹木がなぎ倒されていくが、フィールドで作った世界ではなにが壊れても平気だ。

「いだってえええええんっ!!」

「さて、これから、どう、動……く?」

ファンシーマはモリヒトのことなど忘れ、公園の外に出ようとする。

フィールドの外には出られないが、ミシリと嫌な音がする。

「すごいねる、体当たりでフィールドを壊すつもりねる!」

「感心している場合か、バレルコネクト・ループ!」

フィールドの壁にぶつかったファンシーマは消えて、公園の中心から現れる。

ループのカードでフィールドの外壁と公園の中心部を繋いだのだ。

ファンシーマはそれに気付かないのか突撃してはループに消えている。

変身の力は変身している間に一定の減り方をし、カードの力はカードを使った時だけ減る。

だが、両方の力を同時に消費するカードがある。

「それが身体強化カードだが、コルル?」

「わ、忘れてましたコル……」

「あの、変身できなければ浄化は……」

ディオバレルは無言で睨む、出来るわけねーだろ、と。

時間が経てば力は回復するが、そうなる前にフィールドの効果が終わってしまう。

ディオバレルはミライに電池式の充電器を渡した。

「型は違うが規格は共通だろう。バイクに乗ってる間に充電しとけ」

「どうするんですか?」

「園内のロングブリッジを使う」

公園の湖にはロングブリッジがある。

ループの設定を変更してファンシーマをそこに移動させるのだ。

「敵は一直線に走ってくる。俺がバイクで突撃して止めるから変身して浄化しろ」

「あの、回復しました……その、1分だけ」

「上等だ、変身したと同時に浄化しろ」

ロングブリッジの中間にミライを置いて岸に向かうディオバレル。

ここから全力で走ればミライのいる場所の近くでファンシーマと激突するはず。

「チャンスは一度、行くぞ!!」

「はい、OKです!!」

「バレルコネクト・ループ『再設定』」

橋の向こう側が光り輝くと同時にファンシーマがあらわれる。

そして、ファンシーマが走り出すと同時にディオバレルもバイクを走らせた。

「行けっ!!」

「プリキュア・ネクストコネクト……ネクストコネクト・フィニッシュ!!」

激突する直前にミライは変身した。

ポーズをとる余裕もない、キュアネクストは即座にフィニッシュのカードを読み込む。

「プリキュア・ネクストダイバー!!」

拮抗するディオバレルの横を抜けて突撃するキュアネクスト。

しかし、敵の防御力は予想以上に高く、すぐに浄化できないでいた。

力をこめ続けるキュアネクストだが時間だけが過ぎていく。

「通れ、通れ、通れ……通りなさいよ!!」

『Battery residual quantity 0』

そんな中、戦いの舞台であるロングブリッジにも異変が起きていた。

踏ん張っているバイクのタイヤがぐら付いているのだ。

「橋が!？」

「いだってええええんっ!!」

足場が崩れる中、空中に投げ出されるプリキュアとガルディオ。

キュアネクストの腕はファンシーマに伸びてはいるが、届いてはいなかった。

「使え、プリキュア!!」

キュアネクストの手の中に小さな箱が投げられた。

それは携帯電話のカバーを外せば見ることが出来る、バッテリーだった。

しかし、ディオバレルがそんなものを投げてよこすわけがない。

そう、投げた姿はディオバレルではなくモリヒトだった。

『Battery exchange・Transformation limit
20』

「プリキュア・二回目ネクストダイバー!!」

再びフィニッシュのカードで加速するキュアネクスト。

「でも、私は大丈夫です。人助けが趣味ですから!!」

満面の笑みを浮かべて胸を張るミライ。

最初のときの勢いとは違う、彼女は自分自身で戦うことを決めていた。

「勝手にしろ……」

濡れた服でバイクを押すモリヒト。

その選択が正しいのか、それは誰にも分からなかった。

どんなに悪い第一印象でも最終的には良い仲に変わっている、奇妙な気質の持ち主でもある。

父の影響もあり運動神経は抜群だが、運動部に対して魅力は感じてないためフリーの身である。

母と再婚した義理の父と三人で暮らしているが『父さん』『母さん』に対し『パパ』と呼んでしまう。

名前の由来は明日と未来

明日原一作

ミライの父ですでに亡くなっている。

正義感の強さからスーツアクター（主にスーパー部隊作品）をやっていた。

名前の由来は一昨日

明日原今日子

ミライの母親で夫を亡くし、再婚している。

位牌の前で泣いていた姿がミライの強い正義感を過剰にした切っ掛けでもあった。

名前の由来は今日

明日原咲治

キョウコと再婚した青年。

掛け声は「プリキュア・ネクストコネクト」

カード使用時は「ネクストコネクト・〇〇」

呼出（コール）

妖精の国や情報端末との通話呼び出し。

結界（フィールド）

使用者が指定したもののだけを残した無人世界の形成。

ただし、いくつかの例外は無人世界に進入可能。

その空間で物体が破壊されても現実世界の物体に影響しない。

好調（ハイテンション）

肉体を上向きに強化し、精神も強化する。

精神攻撃からの回復としても使えるがデメリットもある。

変身時間も短縮されるため変身時間の短いキュアネクストにとっては使いにくい

カード。

加速（スピード）

肉体の速度に関する部分を強化する。

回復速度も、食事の時間も強化できる。

怪力（パワー）

